

講演 現代教育の課題

和光大学教授

中野 光

ご承知のことと思いますが、本校は岡崎高等師範学校の附属中学として生まれました。私にとって岡崎高等師範学校は良き母校であり、それに付設された附属学校も素晴らしいものでありました。その素晴らしさが何によるものであるかということ、私は次のように考えております。

戦前の日本の師範学校の附属学校は、教員養成の実習校であると同時に教育方法についての研究機関であったと言われていますが、実際はその名の如く normal school でありました。normal school は日本では師範学校と訳されておりますが、もともとは model school という言葉に近いように思います。ここでは優秀な教員を集め、生徒も選抜を行ない、実際にはエリート教育を行っていたわけですから。教育についての科学的な研究というよりは、文部省が決めた様々なモデルをまっ先に実践にうつして、全国の学校に普及する役割を果たしていたと思います。戦後の附属高校も戦前の normal school といった性格を一般的には受け継いでしまい、附属学校のあり方が根本的に検討されることなしに、今日にいたってしまいました。ただ、東京大学教育学部とこの附属学校は戦後生まれたものではありませんが、新しい附属学校のあり方をめざして生まれたものだと思っております。

校長の田浦先生は、日本の教育学者の中でデューイについてもっとも深い造詣をお持ちですから、田浦先生の前でデューイのことをしゃべるのは鉄面皮だと思っております。デューイが34才の時に(1894年)、シカゴ大学に招かれ、1896年に有名な附属小学校を作ります。ところがデューイの附属小学校は normal school とは言わず、laboratory school という名前をつけます。教師はわずか2人で生徒は16人の小さな学校でありました。ここでデューイは意欲的な試みをし、1899年“School and Society”という報告書を出します。しかし、laboratory school としてのデューイ・スクールは、1903年廃校になります。その後、デューイ・スクールがどうなったかということ知りませんでした。最近、次のようなことを知りました。デューイ以前の教育学者としてはパーカーがおりますが、パーカーはペスタロッチーをアメリカに紹介普及した功労者だと評価されています。彼はクインシーの normal school の校長となって教育運動をくりひろげたわけですが、パーカーの normal school の

附属小学校が何と呼ばれたかを、アメリカの normal school を研究している友人にたずねましたところ、model school と呼んでいたと教えられました。このパーカーの model school とデューイ laboratory school とが合併して、School of Education という新しい学校となり、デューイはこの学校のディレクターとなった事実があります。しかしながら、デューイ・スクールの教師たちとパーカーの normal school の教師たちとはことごとく意見が対立し、ついにデューイ・スクールの教師たちは合併後、大挙辞任するという事件があったようです。この事件は normal school 派と laboratory school 派との対立ととらえてよいようです。

戦後の附属学校のあり方をみてまいりますと、model school としての附属と laboratory school としての附属があるのではないかと思います。旧来の附属は、やはり normal school としての附属であり、この学校は laboratory school ではなかったかと思えます。

日本の学校の流れをみてまいりますと、様々な学校がありますが、laboratory school を標榜した学校が大正6年に出来ています。東京・牛込に出来た成城小学校は沢柳政太郎が創設したのですが、中学校校長を引き受ける際に、小学校を作るなら校長を引き受けても良いと言ったといひます。中学校に付設された学校を実験学校と名づけ、教育についての科学的実証的な研究をするところであるといひています。国家権力によって、財界によって、教育のあり方が変えられていっている、このことは、国家の、民族の将来を考えると由々しき問題である。やはり教育については、科学的実証的な研究に裏づけられた提言をすべきであるというのが沢柳の主張でした。明治42年に出版された沢柳の『実験的教育学』で、従来の教育学は、ヨーロッパ教育理論の上すべりの移入だと批判し、教育実践家たちと教育学者たちとの協力による科学的実証的な研究を押し進めていかなない限り日本の本当の教育学は構築されないと強調しておりますが、現代にもあてはまる箇所が多いようです。

沢柳は京都帝国大学総長を退き、小さな実験学校を作り、熱心に教師たちと語りあったわけですが、彼には「真理の前には平等である」という有名な言葉があ

ります。真理の前では、校長も訓導もないというわけです。大正8年に成城小学校は小原国芳を主事として広島から招きますが、沢柳と小原の考え方には若干の相違がありました。小原のばあい、おそらくそうではなかったと思いますが、創立10年を迎えて、沢柳は、実験学校としては不満足であると挨拶をしております。成城の教師集団がその違いをどのように受けとめたかは分かりませんが、沢柳の根本思想には、教育は子どもの発達に即すべきだ、という考え方がありましたから、たとえば、成城小学校では、1年生から3年生までは「修身」を置かず、「算数」も「数学」と呼んで3年生からはじめました。また成城小学校の訓導であり、明星学園に移った照井猪一郎は子どものポキャブラリーの研究をふまえて、例のサクラ読本の前身を作りますが、これなどは成城の実験学校としての成果が昭和に入って実ったものだと思います。しかし、私はその沢柳が、「高等専門教育などは教育学が研究する必要はない」と申していることには大変な反発を感じます。大学の教育それ自体を研究することは高校の教育にくらべると10年から15年おくらせてしまっているような気がします。

そういう立場から戦後の教育のあり方を考えてみますと、昭和30年代に、教師への要求・課題が変わってきたのではないかと思います。たとえば、その頃、三一書房から『高校生奮戦記』という高知の高校生徒会連合の記録が出されていますが、「高校の先生はよそよそしい」、「歴史を過去のこととしてではなく、現代とのつながりで、思想を通して語って欲しい」などと書いています。こういった主体的な教育要求は私どもの時分には考えられなかったことで、これが一部にはなく、もっと広汎にひろがっていたら、日本の中等教育の様相はもっと変わっていたのではないのでしょうか。

残念ながら、今日の高校生について「三無主義」、「四無主義」、最近では「六無主義」といったことがいわれています。一体何がこういったことをもたらしたのでしょうか。この間に対する答えは極めて難しいものです。しかし、端的に言えば、戦後の高校三原則の崩壊、多様化政策、その過程で、高校生の人間としての発達が失われていったということだと思います。この点に関して、最近、私は貴重な証言を読む機会に恵まれました。真野常雄先生の遺稿集『ひとすじの道』でございます。その中に、愛知の高校の小学区制が大学区制へ移行された時のことが記されております。真野先生は前の愛知一中、県第一高女を、特権的と批判し、戦後の教育改革を高く評価されております。この人が昭和26年市の教育長となられ、県下の大勢が大学区制へ移行しようとしていることを批判されました。県教育長の3つの主張、(1)「牛は牛づれ馬は

馬づれ」という言葉がある通り、能力別に教育をした方が能率的である、(2)「好きな学校」を選べないのは、新憲法とも矛盾する、(3)小学区制では越境入学を防げない、を真野先生は逐一反論され、(1)「牛は牛づれ……」は間違いである、学校は全人教育の場であって、偏知に墮してはならない、(2)自由のはきちがいであり、小学区制こそが、真の自由を体現しうる平和な学習環境を作るものである、(3)人に名誉心、利己心のある限り大学区制にしても越境入学は解決しない、と反駁されています。その後、県教育長は与えられた権限を用いて大学区制移行を強行してしまいましたが、真野先生は、「10年後、15年後の本県教育は歪曲され、真の意味の人間教育は不可能になるであろうと述べたが、果たせるかな、私の予想通りとなった」と書いておられます。この真野先生は昭和の初め愛知第一師範附属小学校で、郷土教育という新しい試みを展開しておられますが、恐らく愛知第一師範附属は、この時期に **laboratory school** をめざしていたのだらうと思います。

現実には目を向けると、実際には色々な制度的な制約があります。私のつとめる和光大学は創立後、間もなく、小さな大学であります。梅根学長は、沢柳精神で行こう、実験大学としての歩みを続けよう、ということを創立の理念の一つにしました。しかし、制度的な枠が色々あり思うように行きません。そういう中で和光大学には、身体障害の学生が20数名、盲・聾・啞の学生もおります。私のゼミナールにも田辺君という全盲の学生がおります。彼の語学力は抜群で、ドイツ語は普通の学生よりもはるかに優っております。小学校2年生の時に失明した人が、晴眼の学生よりも達者であるという点に、私どもは言い表わすことのできない励ましを受けます。最近、彼は、盲学校以外の学校の教師にはなれないだろうかと言いつけている訳ですが、私は、目の見える生徒が生きる希望を失っている中で、目の見えぬ人間が絶望と闘いながら、必死に生きている姿に偉大な教育力を見出したいのです。日教組の制度検討委員会の報告書では「共同教育」という言葉が使われていますが、「分離」するという現在の制度を疑い、共に歌をうたい、体操をし、授業を受ける「共同教育」を実現して行く必要があると思います。それは、身体障害者にとってだけではなく、私どもにとっても幸せなことであると思います。また、私の大学では、プロ・ゼミナールというのをやり教師も学生も共に、研究したいテーマを設けてやっております。来年度、私は「わだつみ世代」というテーマで学生たちのオヤジの世代の研究をしてみたいと思っております。金沢に講演に行きまして、金沢の桜ヶ丘高校でも、これと同じようなことをやっていることを知り

ました。必修クラブを逆手にとって、自由選択ゼミナールというのを開き、各教師が一テーマずつ、石川啄木の研究であるとか、核エネルギーと原子力の平和利用であるとか、日本近代女性史といったまさに現代的課題について生徒とともに研究しておられるようです。

今日の状況では、様々な実践を創造的に展開し、その成果を私物化しないで大衆化して行く必要があります。制度は外圧的なものですが、「習俗としての制度」には歴史の厚みがあります。学習指導要領がいくら変わっても、10年前と考え方を変えずに、より進歩的な授業をやっている例はいくちもあります。「習俗としての制度」を豊かに作り上げて行くことは、実践・研究を通して可能になるのではないかと思います。日本の教育改革はそうした実践・研究の成果を「習俗」として定着させていくことがないかぎり、底の浅いものにならざるをえません。私に関心をもっております大正期の自由教育にしてもそういうことがいえません。あの教育改造への動向は民間の側からつくり出され、さまざまな抑圧や権力の干渉の中でも貴重な教育遺産をのこしました。いったい、大正期の自由教育をになつた教師たちはどこから改革のエネルギーをつくり出したのでしょうか。たとえば、小原国芳氏は、教育の関係の原型は寺子屋にあるのではないかと申されておりますし、明星学園を創った赤井米吉氏は、「ダルトン・プランを紹介したとき、山奥の複式学級の必要からだった」と申されておりました。よく、大正新教育はヨーロッパの近代教育の「移入」ということがいわれていますが、むしろ自らの歴史的な土壌から湧き出てきたという側面に注目する必要があると思います。

こんにち、教育において、色々な制約がありますが、変えるべきことは何か、変えてはならないことは何か。それを見極めることが今とりわけ重要なことで

はないかと思います。それには教育についての科学的実証的研究が不可欠だと思います。3年に1度の今回の中高等教育研究協議会にお招きいただいたことにお礼を申し上げるとともに、名古屋大学教育学部附属学校が現代の教育課題に対して積極的に立ちむかっていく **laboratory school** として一層発展されることを願い、そうした本校のあり方が多くの方によって支持されていくことを心からご期待申し上げたいと思います。

《追記》

「現代教育の課題」という私にとって大きな課題を与えられたのですが、不十分な「序論」となっていました。いわゆる「本論」に相当する内容はあの研究協議会の各分科会の中にゆたかにふくまれていたと思っております。第2日目、私は公害教育の分科会に参加いたしました。そこでの報告と討議において今日私たちがどうしてもとりくまねばならない教育の現代的課題があきらかにされた、と思っております。

それにしても、そういう課題が名大の附属中・高校という **laboratory school** が主催する研究会において正面からとりあげられることの意義を私は貴重なことだと考えております。教育だけにかぎりませんが、「原点にくるいがあったとき、その後のすべてがくるってしまう」ということを私は現代教育の課題を考えるさい、もっとも大切なことだと考えています。附属学校 = **laboratory school** 論が「原点」を決める発想になりうるかどうか、「習俗」としての制度を実践と研究にもとづいて創り出していくことが教育改革運動の原点になりうるかどうか、そうした点について私の講演における問題の提起を批判的にご検討いただければ幸いです。

(73. 12. 14, 中野 光)